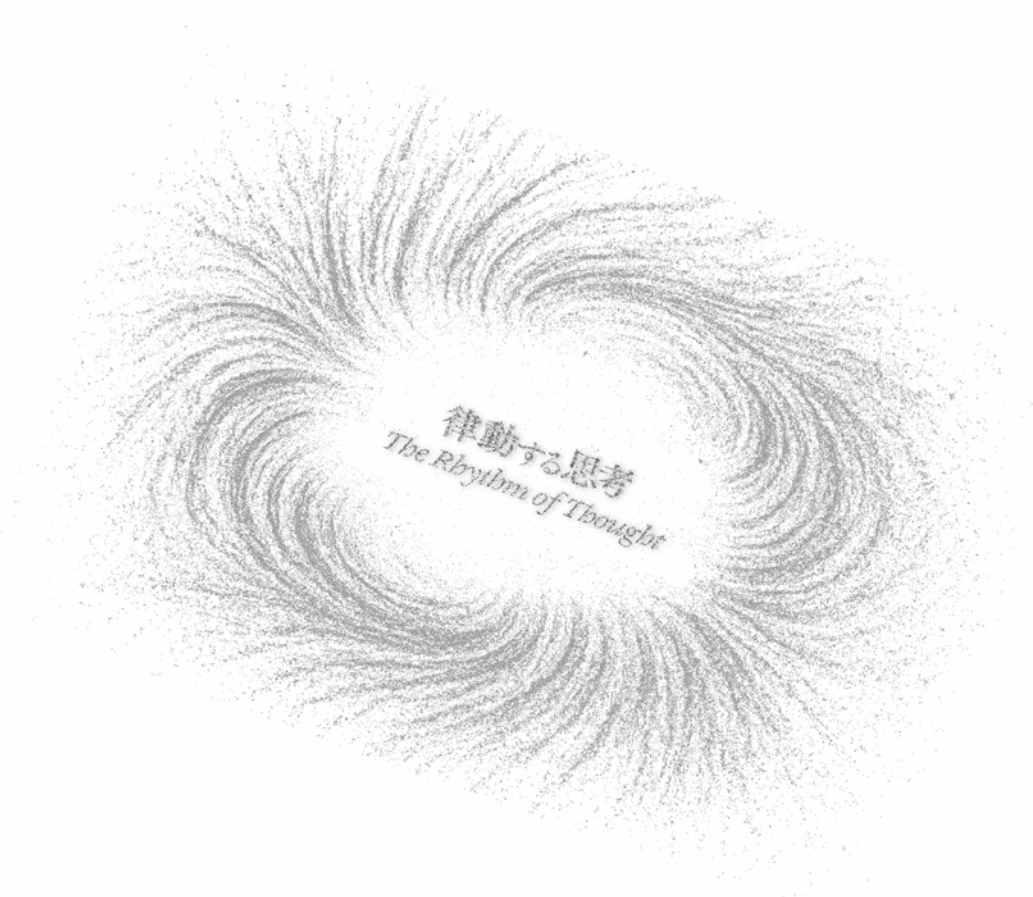


Yoichiro Kamei / Moriyuki Kucubara / Takuro Sugiyama / Soshi Matsunobe / Daigoro Yonekura

8月23日 | 土 | 10月12日 | 日

亀井洋一郎 / 桑原盛行 / 杉山卓朗 / 松延総司 / 米倉大五郎



poolside gallery

ステートメント

本展「律動する思考」では、反復・規則性・身体といった構造的要素を内包した制作方法を実践する亀井洋一郎、桑原盛行、杉山卓朗、松延総司、米倉大五郎の作品を通して、「思考」の在処について再考を試みようと思う。

ここでいう「思考」とは、静的な内省を意味するのではなく、むしろ身体や手の運動、あるいはルールに基づく行為を通じて世界と応答し続ける動的なプロセスとともに発露するものと仮定する。

本展で紹介するアーティストたちは、それぞれが独自の方法論やルールに従いながら、線を引き、構造を組み立て、時間と労働(シンプルな行為)の痕跡を可視化していく。反復される動作の中に潜む逸脱や、認知のずれに現れる揺らぎこそが、「律動=rhythm」の本質であり、それが鑑賞者の知覚にも新たな揺さぶりをもたらすだろう。

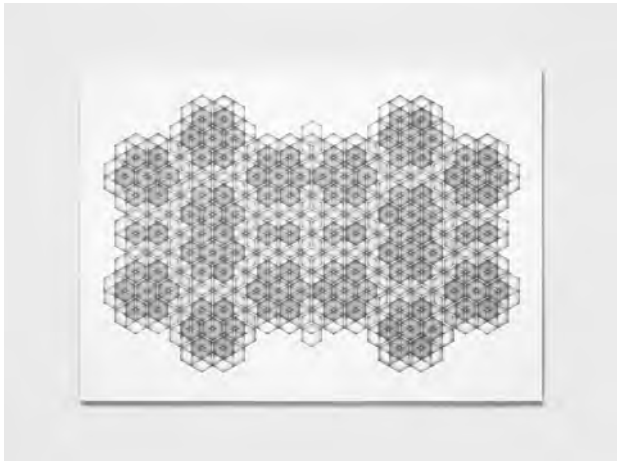
制度的な言語や意味の領域を超えて、生成の運動やその過程に思考は宿り、粛々と立ち上がってくるのではないだろうか。

POOL SIDE GALLERY について

POOL SIDE GALLERYは2024年春、金沢の地から現代アートを発信する場をオープン。

日本のアートシーンを牽引する都市である東京、大阪・京都、そして金沢を繋ぐ場として、新進気鋭のアーティストたちによる化学反応を観測する実験室として、スタートしました。

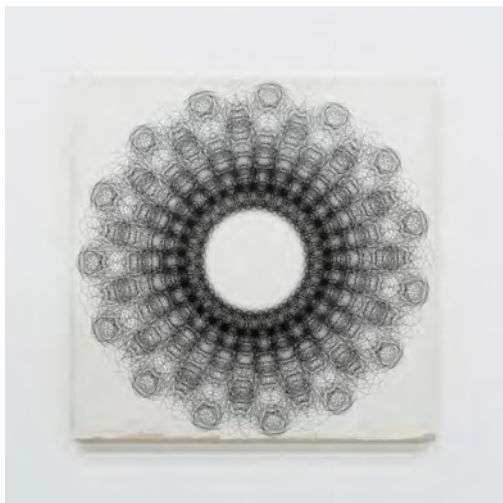
亀井洋一郎 | Yoichiro Kamei



1974年、香川県生まれ、沖縄県在住。京都市立芸術大学大学院博士(後期)課程を修了。代表作である「Lattice receptacle (ラティスレセプタクル)」シリーズでは、同一ユニットの集積による磁器の構造的造形を通じて、やきものに内在する秩序やそれに伴う空間性を探究。

近年はやきもの表現で培ったテーマやシステムをドローイングへと展開し、新たな視点から自作の再考を試みている。主な個展に「モルフォロジー／コスモロジー」(あーとらんどギャラリー/2025)、「様相の舞台」(SILVER SHELL/2018)。主なグループ展に「高松コンテンポラリーアート・アニュアル 物語る物質」(高松市美術館/2017)、「クロスポイント／交差する視線 20の表現」(香川県立ミュージアム/2017)、「菊池寛実賞 工芸の現在」(菊池寛実記念智美術館/2016)、ジャカルタ現代陶芸ビエンナーレ(インドネシア国立美術館/2014)など。

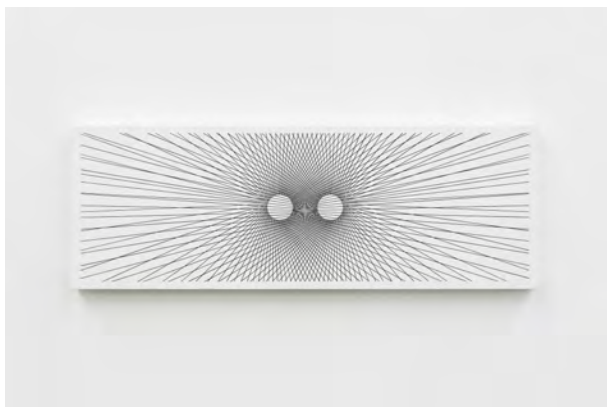
桑原盛行 | Moriyuki Kuwabara



1942年、広島県生まれ。

1962年、日本大学芸術学部美術学科造形専攻卒業。桑原の制作は、格子点を起点に点を洗い出し選別したうえで、選別された複数の点を同一半径の円で結ぶという明確なルールに則って進められる。これらの工程はすべて、コンピューターなどの技術を介さず、作家自身の手作業と試行錯誤によって導き出されている。この制作手法は、1963年、日本大学芸術学部在学中にアルミ板に点状の傷をつける試みから始まり、そこから「群れ」に内在する力の存在に気づく契機となった。1964年頃からは、この原理に基づきコンパスを用いて円を描くという現在に続くスタイルを確立する。1968年に第12回シェル美術賞(現・Idemitsu Art Award)を受賞し、その後も1978年の第4回 インド・トリエンナーレへの参加をはじめ、色彩美術館や池田20世紀美術館などで個展を開催するなど、国内外で高い評価を受けてきた。桑原の精緻なドローイング作品は、大原美術館、世田谷美術館、国立国際美術館などの日本各地の主要美術館に収蔵されている。

杉山卓朗 | Takuro Sugiyama



1983年、千葉県生まれ、兵庫県在住。大阪美術専門学校研究科を修了。キャンバスを前にして起こるイマジネーションや衝動を廃して、線や面を反復、再構築しながら絵画を制作。イメージの生成において、作家自身の介入を最小限にとどめた制作方法を用いている。マスキングを使わずに描きながらも肉筆という霊性からも限りなく遠い絵画表現を目指す。

主な個展に「PAGUROIDEA」(TEZUKAYAMA GALLERY/2024)、「周縁と方法」(五台山竹林寺/2017)、「LOOP」(ASYL [元梅花堂]/2014)。主なグループ展に「2つの時代の平面・絵画表現-泉茂と6名の現代作家展」(Yoshimi Arts/the three konohana/2021)、「DELTA×WHAT CAFE exhibition 'EXPANSION」(WHAT CAFE/2021)、「SPR」(FINCH ARTS/2020)、「paint()ings」(Yutaka Kikutake Gallery/2018)、「江之子島芸術の日々2017『他の方法』」(大阪府立江之子島文化創造センター/2017)など。

松延総司 | Soshi Matsunobe



1988年熊本県生まれ。滋賀県在住。2008年京都嵯峨芸術大学短期大学部卒業。2023年ポーラ美術振興財団在外研修員としてフランスにて研修。

「線」「影」「無意識」「地」などの掴みどころのない事物を主題とし、可変性、拡張性、複数性を特徴とするコンセプチュアルアートを制作。日常のなかで人々が無意識化している抽象的な物事を捉え直し、それらがどのような環境や認識の上に成り立っているのかミニマルな手法で顕在化することを試みている。

主な個展に「Direction of Materials」(BO/OK/2025)、「私の石」(私立大室美術館/2025)、「Woven Knot」(gallery chosun/2024)。主なグループ展に「家具と抽出し」(A-lab/2024)、「Dialogues」(東京日仏学院/2024)「not a house」(MBL Architectes/2024)、「VOCA展2024 現代美術の展望」(上野の森美術館/2024)、「石と植物」(滋賀県立美術館/2022)、「Soft Territoryかかわりのあわい」(滋賀県立美術館/2021) など。

米倉大五郎 | Daigoro Yonekura



1975年、広島県生まれ、広島県在住。2006年 広島市立大学芸術学研究科博士課程修了 博士(芸術)。

2009年、ポーラ美術振興財団若手芸術家の在外研修に対する助成により、ベルリン芸術大学イケムラ・レイコ研究室(聴講生)。もし絵画の誕生が黒と白の液体だったなら、その水面はなにを映し出したのだろうか。白と黒の湖面は風に波立つ風景を反射したかもしれない。白と黒の溪流は濃淡の生々流転する形象を描いたかもしれない。白と黒の海は雨に打たれる空に相似したかもしれない。あるいは静止した水は鏡にもなる。私たちはいつも水辺に立っている。

これまでの主な個展に、「FOLDS of PAINT」(mm project / 2017)、「more than painting, less than painting, or anything else」(hpgrp GALLERY/2020)、「smoke and mirrors, and shade」(THE POOL/2022) など。

Information | 展覧会概要

[タイトル]

律動する思考 - The Rhythm of Thought

[会期]

2024年8月23日(土) - 10月12日(日)

[出展アーティスト]

亀井洋一郎 | Yoichiro Kamei
桑原盛行 | Moriyuki Kuwabara
杉山卓朗 | Takuro Sugiyama
松延総司 | Soshi Matsunobe
米倉大五郎 | Daigoro Yonekura

[会場]

POOL SIDE GALLERY, 金沢市(石川)

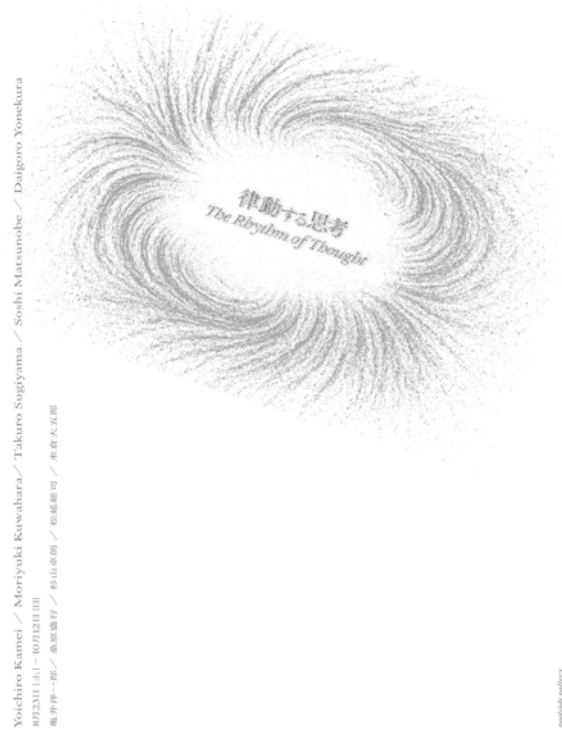
[KV (キービジュアル)]

こちらからダウンロードをお願いいたします。

[作品画像]

こちらからダウンロードをお願いいたします。

* ご使用の際は「© 作家名」と記載頂きますようお願いいたします。



Contact | お問い合わせ

[アクセス | ACCESS]

〒920-0962石川県金沢市広坂1丁目2-32 北山堂ビル2F
Kitayamado Bldg. 2F, 1-2-32 Hirosaka, Kanazawa-shi, Ishikwa
920-0962

[OPEN]

金曜日-日曜日 / 12:00-18:00
FRIDAY - SUNDAY / 12:00-18:00

[WEB]

<https://poolsidegallery.jp/>

[MAIL]

contact@poolsidegallery.jp (岡田)



POOL SIDE GALLERY